課題名

森林管理署における自動撮影装置による野生動物の調査について

機関名
所　属　後志森林管理署　　　　　　　氏名　野崎　龍彦
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　高久　雄太

1．課題を取り上げた背景

近年、森林の有する公益的機能の発揮への期待が高まる中で、生物多様性保全の観点から、国有林でも森林施業が野生生物の生息・生育環境へ与える影響を評価する必要があると考えられます。しかしながら、森林管理署が主体となってのそのような調査はあまり行われていません。

そこで、森林総合研究所北海道支所が行っている「野生生物観測ネットワーク」に短期・一時調査として参加し、自動撮影装置を用いた野生生物の調査を国有林内で行いました。

また、実際に伐採等の森林施業が行われている箇所でも調査を行い、自動撮影装置を用いた調査によって、森林施業が野生動物に与える影響を評価できるのか検討しました。

2．取組みの経過

2008 年から 2010 年にかけて、日高南部森林管理署御園西森林事務所および後志森林管理署喜茂別森林事務所、京極森林事務所において調査を行いました。

2008 年および 2009 年の日高南部森林管理署での調査は、伐採の行われる箇所周辺の林道等と、その少し上流側の伐採の影響が無いと考えられる林道等で伐採前、伐採中および伐採後の長期間にかけて調査を行いました。また、伐採の翌年、同じ箇所で再度調査を行いました。

また 2010 年の後志森林管理署での調査は、伐採の行われる箇所周辺の林道のみで調査を行いました。

3．実行結果

いずれの調査においても、普段仕事で国有林に入ったときには見ることの無いようなものも含めて様々な動物を撮影することができました。

アライグマやミンク、ニホンテンなどの外来生物も撮影できました。

また、日高南部森林管理署では後志森林管理署と比べて、エゾシカが非常に高い頻度で撮影されました。

森林施業の与える影響については、伐採が行われる箇所において伐採期間中および伐採期間後の撮影頻度は、伐採前に比べて低くなりました。また、伐採を行わない箇所では伐採前から伐採中にかけては大きな変化は無く、伐採後には伐採が行われる箇所と同様に撮影頻度が非常に少なくなりました。

4．考　　察

森林施業の与える影響については、伐採期間中、伐採期間後に撮影頻度が低くなりましたが、伐採期間中についてはそれほど大きな変化とはいえず、伐採期間後には伐採を行っていない箇所でも撮影頻度の低下がみられることから、時期等による変化など他の要因も考えられるため、今回の調査では森林施業の与える影響を評価できるまでには至りませんでした。森林施業の与える影響を評価するには、同じ箇所同じ時期に毎年継続的に調査を行う必要があり、また、より多くの場所で同様の調査を行う必要があると考えられます。

また、この自動撮影装置による調査では外来生物の侵入状況や在来種の地域的絶滅、エゾシカなどの数の増加状況など様々な情報を得ることが出来ます。今回参加させていただいた森林総合研究所北海道支所が行っている「野生生物観測ネットワーク」に、より多くの機関、特に全道各地にある森林管理署が参加・協力することにより、全道的な観測ネットワークを広げ、森林管理、野生生物の保全管理や研究などにデータが活用されることを望みます。